

——卒業論文要旨——

「コトとノの使い分けについて」

石井 龍 治

0. 本論は、補文を導くコトとノの使い分けについてまとめたものである。補文を導くコトとノには、次の三種がある。

- ① 同格名詞のコトとノ
- ② 同一名詞のコトとノ
- ③ 分裂文にあらわれるノ

このうち、②と③については、使い分けがはっきりしているの、本論で主に取り上げたのは、①のコトとノである。本論の中身は、次の三点に集約される。

- 一 述語を、(ア)ノしかとらない述語、(イ)コトしかとらない述語、(ウ)コトとノの両方をとる述語に分ける。
- 二 コトとノの意味を記述する。
- 三 時制、引用標識との関係、(ウ)の述語は何に基づいてコトとノを選択するのか、についてまとめる。

1. コトとノをとる述語の分類

(ア)ノしかとらない述語：「待つ」「手伝う」「助ける」「見る」「凝視する」「注視する」「ながめる」「みつめる」「聞く」「感じる」「仰視する」「見える」「目にはいる」「目にうつる」「目立つ」「聞こえる」「うるさい」「やかましい」など。

(イ)コトしかとらない述語：「ある」「ございます」「ない」「多い」「ありうる」「できる」など。

(ウ)コトとノの両方をとる述語：「知る」「耳にする」「見落とす」「悟る」「思い出す」「発見する」「決める」「承知する」「計画する」「後悔する」「反省する」「憂える」「おそれる」「鼻にかける」「みとめる」「予言する」「予告する」「忘れる」「もらす」「物語る」「主張する」「約束する」「知らせる」「申し上げる」「示す」「保証する」「伝える」「挙げる」「命じる」「頼む」「提案する」「要求する」「期待する」「願う」「望む」「勧める」「指図する」「推賞する」「祈る」「はっきりする」「知られる」「わかる」「知れる」「明らかにになる」「難しい」「確かだ」「億却だ」「すきだ」「条件だ」「原因だ」「目的だ」「急務だ」「課題だ」「望ましい」「望まれる」「根本だ」「主眼だ」「大切だ」「願いだ」「カン

にさわる」「肝要だ」「喜びだ」「必要だ」「普通だ」「使命だ」「はずかしい」「有名だ」「やさしい」「重大だ」「楽しい」「嫌だ」「いやだ」「淋しい」「きびしい」「導かれる」など。

2. コトとノの意味

上の分類によって、(ア)に含まれる述語は、「待つ」「手伝う」「助ける」の三語と知覚動詞（形容詞）であることが分かった。(ア)の述語に共通している点は、主文の述語が表わす行為と、補文の意味する動作とが同時に生起していなければ使えないという点である。つまり、(ア)の述語は、補文に対して「同時性」を要求するのである。この点については、英語にも同じような現象があり、補文に対して「同時性」を要求する英語の動詞は、補文として「はだか不定詞」をとるということが、中右1980で指摘されている。

上の分類で(イ)に含まれる述語は、本論ではイディオムとして処理した。寺村1981と同じ見解である。

上の分類で(ウ)に含まれる述語の数は、大変多く、さらに下位分類される。

- i 表層文の格助詞の違いによって、コトしかとれなかつたり、両方とれたりするもの。
- ii 補文をカ格でとったり、ニ格でとったりする述語で、ニ格の場合にはノしかとれず、カ格の場合には両方とれるもの。
- iii いかなる場合でも、両方とれるもの。

iiiの述語がたくさんあるので、どうしてもコトとノの意味を記述し、どちらでもよい場合に何に基づいて選択しているのかを示す必要がある。しかし、この点については、久野1973、Josephs 1976、井上1976などと同じような記述におちついた。

3. 結論

- I 補文に「同時性」を要求する述語は、ノしかとれない。
- II 命令、要求、提案、依頼、願望、祈願を表わす述語は、補文に未完了時制を要求し、表層文に

「NP = (NPは、補文の動作の行為者)」という名詞節が現われている場合は、コトしかとれないが、それ以外の場合は、コトとノの両方が許容される。

III (ウ)のiiiに分類される述語の場合は、話者(または、その文の主語が示す人物)がその命題を〈間接的〉〈抽象的〉に捉えている場合には、コトが選択され、〈直接的〉〈具体的〉に捉えている場合には、ノが選択される。

参考文献

井上和子1976 『変形文法と日本語(以下)』 大修館書店

久野 暉1973 『日本文法研究』 大修館書店

寺村秀夫1981 『日本語の文法(下)』 大蔵省印刷局(国立国語研究所)

中右 実1980 「テンス、アスペクトの比較」『日英語比較講座第2巻 文法』 大修館書店

Josephs, Lewis S. 1976, "The syntax and semantics of Japanese complementation," in M. Shibatani ed., Syntax and Semantics: Volume 5, Japanese Generative Grammar, Academic Press.

—— 修士論文要旨 ——

「複合動詞の総合的研究」

山本清隆

本論は、現代日本語における複合動詞を統語論的意味論の立場から分析し、その構造を明らかにすると共にパターン化を試みようとしたものである。

先ず、「I. 研究史篇」では大槻文彦・山田孝雄・松下大三郎・橋本進吉・時枝誠記ら文法諸家や最近の研究者が「複合語」あるいは「複合動詞」をどのように捉え、定義しているかを概観した。

次に、「II. 分析篇」で本論の複合動詞論を展開した。本論では、動詞の意味として動詞の名詞句支配に着目する。すなわち、動詞には同一文中で共起する名詞句との間に密接なつながりがあり、どのような名詞句をどれだけとるかが動詞個々の性質として予め決まっている。複合動詞はこのような動詞が複数個結合したものであるから、それぞれの動詞にもそのような名詞句支配がみられるはずである。しかし、実際にはその支配のあり方は複雑なものとなっている。複合動詞を前項と後項の二項結合に限り、名詞句支配力を有する動詞をV、支配力の弱いもしくは有さない動詞をvとすると、複合動詞は次のようにパターン化される。

I. [V₁-V₂]

○花子が目を泣き腫らす。

- { a. 花子が泣く。
- b. 花子が目を腫らす。

II. [V₁-v₂]

○火が燃えあがる。

- { a. 火が燃える。
- b. *火があがる。

III. [v₁-V₂]

○太郎が寒さに打ち震える。

- { a. *太郎が寒さにノを打つ
- b. 太郎が寒さに震える。

IV. [v₁-v₂]

○太郎が次郎に計画を打ち明ける。

- { a. *太郎が次郎に計画を打つ。
- b. *太郎が次郎に計画を明ける。

以上のように、従来複合動詞と一般に呼ばれていたものは、その構造上の相違から四種に大別できるが、IIIとIVについてはもはや複合動詞の規定から外れたものとして処理すべきであろう。IIIのv₁は接頭辞化したものと見るのが妥当であるし、IVについては単純語化したといえる。したがって、今後複合動詞論としてはIとIIのタイプのものを取り扱っていく方向が望ましい。ここで、IIを除外しないのは、次のように名詞句支配力を無視できないv₂の存在による。

○太郎がりんごにかじりつく。

- { a. 太郎がりんごをかじる。
- a'. *太郎がりんごにかじる。
- b. *太郎がりんごにつく。